

蹴落とされ聖女は極上王子に拾われる2

登場人物紹介

ライムート(おっさん)

おっさん姿のライムート。

加賀野絵里

聖女として、異世界に召喚された大学生。召還途中で一緒にいた同級生に突き飛ばされこの世界の辺境に落ちてしまった。そのおかげで、おっさん姿のライムートと出会い彼と結婚。現在、幸せな新婚生活中。

ライムート

シルヴァージュ国の王太子。魔法で「おっさん」姿にされていたが絵里に愛されたことにより元の姿を取り戻した。

ジークリンド

ライムートの乳兄弟で、側近。ライレ夫人の息子で、生真面目な性格をしている。

ライレ夫人

シルヴァージュの貴族で、絵里に仕える女官長。

片野春歌

絵里の召還に巻き込まれた同級生。絵里を突き飛ばした上、聖女を騙りライムートたちによって成敗された。

予言者

ライムートをおっさんに変えた人物。滅多に人前には現れず、その存在は謎に包まれている。

プロローグ

それは、冬の厳しい寒さが春の温かさにその座を引き渡そうとしている季節のことだった。空には星が瞬き、わずかな月明かりが地上を照らす。その中を、必死で走る人影があった。人影の足元はごつごつとした岩場が続き、ほんの少し離れた場所には波が激しく打ちつけている。一つ間違えば、まだ冷たい海へ転落してしまうそこは、昼間でもめつたに人の来ない場所だ。夜ともなれば本当に人っ子一人——いや、野生動物でさえ、まず近寄らない。それなのにその人影は、白く長い衣をまとい、外歩きには決して向かないサンダルを履いている。間違ってもこんな時間、こんな場所にそぐわない格好で懸命に足を運ぶ様子からして、人影にはよほどの事情があると思われる。

——大いなるフォスがしろしめすフォーセラ。

その世界にある大陸の最西端に位置するのがディアハラだ。そして、ディアハラの国土の更に西に浮かぶ小島には、この国でも規律が厳しいことで有名な修道院と神殿が存在していた。件の人影が走っているのは、まさにその小島の海岸である。

月明かりに浮かび上がったのは、長くうねる髪を持ち魅惑的な曲線を描く体つき、美貌の若い

女性だった。

「つ……はあ、はあ……っ」

夜風は冷たく、海の水は更に冷える。懸命に避けているようだが、無情な波しぶきが容赦なく彼女を襲った。

体力を奪うには十分なほどに濡れた衣で、必死になって走る様子は尋常でない。

不意に、彼女の後方にある修道院で、全ての窓の明かりが一斉にともった。夜明けとともに起きだし日が暮れると速やかに就寝するのが習いの修道院には、異例の事態である。

更に、風によつて修道院から喧騒がかすかながらも伝わってくる。

それを耳にした女が忌々しげに舌打ちした。

「ちょ——もしかして、バレたっ？ ……冗談じゃないわ、またあそこに逆戻りなんて、まっぴらごめんよ！」

彼女の名は片野春歌。地球の日本という場所から、このフォーセラへ転移させられた女性だ。

——時折、なんらかの事情で世界と世界の間に落ち、最終的に別世界にたどり着く者がいる。フォーセラでも、過去にそのような存在が幾人か確認されており、その現象を『界渡り』と呼んでいた。

だが、春歌の場合はそれら『界渡り』と少し事情が異なる。彼女がこちらに来たのは、この世界を創造し今も見守り続けているとされるフォスの御業によるものだ。

ただし、本来ならば、彼女はここに来るべき存在ではなかった。

フォスが転移させようとしたのは、加賀野絵里という名の女性だ。春歌は、フォスが絵里を呼び寄せようとした時にたまたま近くにいたために、巻き込まれたのだった。

それだけであれば『気の毒な』被害者なのだが、彼女は召還中に絵里を突き飛ばした挙句、フォスが絵里のために用意した『聖女』という称号と、それに伴うディアハラでの待遇を、我が物とした。

それを知った人々は、春歌が行ったことは、フォスの御心に逆らう行為であり罰せられる必要がある、と判断した。

とはいえ、そもそもその事情——聖女の召喚に間違つて巻き込まれただけであることを考慮して、重罰に処するのではなく修道院に預かりの身にしたのだ。

その修道院は規律が厳しく、日々、様々な仕事が課せられる。しかし、それはそこにいる全ての者に対してであり、春歌だけに特別厳しいわけではない。

質素ではあるが栄養のあるものをきちんと三食供され、個室も与えられる。

そんな中で、春歌は日々をおくっていたはずのだが……

「それにしても、バレルの早すぎないっ？ あの修道士ったら、マジ、使えないわねっ！」

何しろ、ディアハラの王宮では『聖女様』として、下にも置かぬ扱いをされていた春歌である。今の境遇に耐えられるはずがなかった。

悪知恵の働く彼女は、表面上おとなしく反省しているふりをし、猛烈な愚痴と罵倒の言葉を隠しながら、チヨロそうな若い修道士を誑し込んだのだ。

涙ながらの悔悟の言葉と一緒に、我が身の不運を語り、持てる女子力を総動員して同情を買う。敬虔な神の使徒であろうとも若い男だ。あっさり騙され、脱走の手引きをしてくれた。

だが、予想していたよりも発覚するのが早い。

身一つで逃げ出してきた春歌は、身を守るためのものを何も持っていなかった。衣の隠しに入っているのは、逃げる途中で目についた、神殿の備品がいくつかだけだ。

首尾よく島を抜け出した後の路銀にするつもりで盗んだのだが、ここでつかまってしまったら、なんの役にも立ちほしくない。それどころか、罪が重くなるだけだ。

だがそれでも、春歌は諦めなかった。諦めるくらいなら、最初から脱走など企てない。

修道院の生活が窮屈すぎることも一因ではあるが、春歌は何がなんでも自分をこんな境遇に追いやったあの女——加賀野絵里に復讐してやらなければ気が済まなかったのだ。

その一念で、疲れ切った体に鞭を打ち走り続けながら、身を隠せそうな岩陰でもないかと辺りを見回す。

その時だ——

バサリと、何かが羽ばたくような音が聞こえた。

こんな夜更けに飛ぶ鳥がいるのだろうか。もつとも鳥だとしても、今の春歌の助けにはならない。そんなことに気を取られている暇はない、一刻も早く身を隠す場所を探そう——そう思う春歌の頭の中に、何者かの声が響く。

しかも声の主は、彼女がなぜこんな時間に一人で出歩いているのかと、問いかけてきた。

「は？ え？ だ、誰っ？」

驚いて足を止め周囲を見回すものの、夜の闇がわだかまるばかりである。空耳だったのかと考え、再度春歌が駆けだそうとすると、またもその声が響く。

「え？ 上？ きゃあっ！ な、何、おばけっ、怪獣っ!? イヤッ、寄らないで、食べないでえっ」失礼な、とその声が憤慨した気がするが、パニックに陥った春歌は、追っ手に見つかる危険も忘れ、ひたすら騒いだのだった——

* * *

「——申し訳ありません、岩場という岩場をはじめ、潜んでいそうなところは全て搜索したのですが……」

「もしやとは思いますが、まだ神殿内に隠れている可能性は？」

「物置から家畜小屋の隅々まで捜しましたが、どこにもいません」

「なんとということでしょう……。ですが、こうなってしまうたからには、急ぎ王宮に連絡を入れねばなりません」

「承りました」

——西の果ての国の、絶海の小島で起きたこの小さな事件が、どのような展開を見せるか。この時はまだ、誰も知る由がなかった。

第一章 お妃様は修業中

大いなるフォスがしろしめすフォーセラ。

その世界にある三日月型の大陸の中央付近に、シルヴァージュ王国はある。

今は新年を迎えてしばらくが経ち、そろそろ冬から春に移り変わろうという時期だ。

ここ、シルヴァージュ王国は、年明けからこちら——正確には昨年の半ばあたりから、近年まれに見る活気に満ち溢れていた。

その理由はいくつもある。

まず第一に挙げられるのは、頻発していた異常気象が鳴りを潜めたことだ。

何年にもわたり季節を問わず吹き荒れていた嵐が、びたりと収まり、晴天に打って変わる。そしてその合間にほどよく降る雨のおかげで、昨秋の実りは、年寄りたちがこぞって『わしらが生まれで以来最高』という出来であった。また、その後に来た冬も、下手をすれば村が一つ丸ごと消えるほど厳しかったここ数年の寒さとは裏腹に、穏やかなものに戻っている。

そして、その喜びの最中に伝えられた、世継ぎの王子が王城に復帰したという知らせ。それが第二の理由だ。

この国の世継ぎの王子——第一王子は有能で前途を嘱望されていたが、成人を迎えた直後に難病

にかかり、十年以上、離宮での療養生活を余儀なくされていた。その間、一度たりとも王宮に戻らなかつたため、死病を患っているのではないかと、国中でまことしやかに噂されていたのだ。

そうしている間に第二王子を推す派閥が出来あがり、国を二分する争いに発展する気配すらあるほどだった。

幸いなことに、第二王子本人には兄に成り代わる気がこれっぽっちもなく、王もまた『第一王子は必ず戻ってくる』と常々口にしていた。それにより、なんとか平和が保たれていた状態だった。ただ、それもそろそろ限界となりつつあったところへの帰還だ。

その上、王子は、己の妻となる黒髪黒目の乙女を連れていた。

なんでも、療養中の彼のもとに忽然と現れたその乙女は、不思議な力でたちまち彼の病を癒したのだという。深く感謝した王子は、その乙女の心根が可憐な容姿と同じく美しいと知り、彼女を妻にと願った。乙女は、王子の求婚を受け入れ、手に手を取っての帰城となったのである。

当然ながら、どこの誰とも知れぬ娘を第一王子の妻——つまりは未来の王妃として受け入れることを拒んだ者もいた。

けれど、第一王子から事の次第を聞いた国王は、乙女を息子の妻にすることを認める。更に、王都にある神殿から驚くべき声明が出されたことで、事態は一気に収束した。

曰く、彼女は、この世界をしろしめす偉大なるフォスが、病に侵されてもなお国と民を思い遣る第一王子を嘉して遣わせた聖なる存在——『奇跡の乙女』である、と。

また、数年来天候不順に悩まされていたのが、このところ穏やかで実り豊かなのは、乙女の力で

あるのだとも発表された。

国民は歓喜し、正式に王太子となった第一王子とともに国の次代を担う者として乙女を大歓迎したのである。

これが第三の理由。

無論、この間、何事もなかったわけではない。

はるか遠くにある海沿いの国『ディアハラ』に、『聖女』の名を騙る女が現れ、シルヴァージュを含めた国々に無理難題を押しつけてきた。だが、それも『真実』、フォスより遣わされた奇跡の乙女』である彼女が、王太子とともに見事に解決したのだ。

シルヴァージュの行く末は、ただひたすらに明るいものとなった。

* * *

「――背筋はまっすぐ伸ばし、片足を内側に引き、腰をゆつくりと下ろします」

「はいっ」

「視線は下げず、そのまま呼吸ほど、姿勢を保ってください」

その動作はカーテシーと呼ばれる貴婦人の礼だ。

貴族階級の女性としては基本中の基本であるそれを、今シルヴァージュの王城で仕込まれているのは、この国の王太子妃、絵里であった。

「上半身が揺れていますよ、妃殿下。もつとしっかりと姿勢を保って――」

「う、太ももが……ふるふるしてる……っ」

たつぷりと布を使ったドレスを着ての礼は、そこその重労働だ。普段はあまり使わない筋肉が悲鳴を上げているが、それを口にするとうすぐさまお小言が飛んでくる。

「お顔には常に微笑みをたたえ、あくまでも優雅にとお心得くださいませ」

そんな無茶など、声に出さず抗議しつつ、絵里は言われたとおりに優雅なつもりの笑みを浮かべると、マナーの教師はかすかに表情をゆるめた。

「……かなりよくなっていますよ。ダンスもですが、本日の調子を忘れずにご精進なさってください」

「ありがとうございます、先生」

体育会系のノリな彼女を見送り、絵里はほっと一息つく。気の利く侍女が、すぐにお茶の用意をしてくれた。

「お疲れさまでございました、絵里様」

「ありがとうございます、足腰が……あいたたた……」

最近、ようやく慣れてきたドレスのすそをさばき、絵里は些かへつぱり腰で椅子に座る。

「慣れてくれば、そのようなこともなくなりませう」

「だいたいんだけど……」

疲れをとるためにいつもよりも甘くしたお茶を口に運びながら、愚痴をこぼした。

「あの方はめつたなことでは、生徒を褒めたりしません。絵里様はもつと自信をお持ちになるべきです」

「そうですね、絵里様。最後なんか、本当にきれいな礼ができてました」

「そうかな？　ありがとう、ディア、エルム」

口々に励ましてくれる侍女たちに、絵里は礼を言う。

ディアと呼ばれた侍女の本名は、ディリアーナ。エルムのほうはエルムニアという。絵里が口にしてるのは、彼女が二人につけた愛称だ。

貴婦人とその使用人の会話にしては少々砕けすぎた物言いであるし、王族を名前で呼ぶのは本来不敬だが、彼女たちの態度は絵里たつての願いだつた。

「——けど、ホントに今更とはいえ、私が王太子妃でいいのかなつて思つちやうよね」

「まあ、絵里様!？」

「だつて、ほら……きちんとしたお辞儀なんて、貴族のご令嬢なら、それこそ子どものころからできて当たり前なんでしょ？　ダンスだつて、ようやくパートナーの足を踏まずに踊れるようになって程度だし……」

努力はしているし、それが少しずつ実っている実感もある。けれど、スタートが遅かつたというハンデを覆すにはまだ至っていない。

それがわかつているからこそその弱音だ。

「——リイは何をするにしても上達が早い。礼儀作法もそうだ。すぐに誰よりも見事な貴婦人にな

る。だから、気にすることは何もないぞ」

「えっ、ライツ？　どうして、今頃……」

絵里の弱音に反論したのは、レッスン室に突然現れたこの国の王太子——つまり絵里の夫であるライムートだ。

彼は明るい金茶の髪に、ブルグレーの瞳、すつきりとした長身で、顔立ちはやつと他ではお目にかかれないくらい整つた男性だ。所謂、絵にかいたような『王子様』なのである。

「殿下。お越しになられる時は、せめて先触れを、と何度もお願ひ申し上げますが？」

王太子であるライムートに対して、恐れげもなく苦情を申し立てるのは侍女の片割れ、ディアだ。彼女たちは絵里がこの城に来た時から仕えてくれている腹心で、王太子よりもその妃に忠誠が厚い。

仮にも一介の侍女が王太子に向かって放つにはかなりの度胸を必要とするセリフを、王太子妃至上主義の彼女は平気で言う。

「急にお出ましになられると、女性には不都合な場合もございます」

もう一人の侍女、エルムも同様だ。

「レッスンはもう終わったと聞いた。一息入れてお茶でも飲んでるところだろうと思つて来てみた」

ライムートは侍女の気持ちを知っているから、彼女らの発言を不敬とはみなさない。平気な顔で会話を続ける。

「……ご明察、恐れ入ります」

「マナーの前はダンスだったんだらう？ 足を踏まずに踊れるようになったのなら、一曲、お相手願いたいものだな」

「い、いや。今はちよつと……くたびれてるので、また今度で」

普通の女性ならばうつつと受け入れてしまいそうなキラキラしいイケメンのお誘いを、絵里は華麗にスルーする。

なぜなら彼女は、若者よりも年かきの男性を好む——所謂、おじ専なのだった。

彼女の本名は加賀野絵里という。

ことは違う世界の日本という国で生まれた彼女は、早くに父親を亡くし、母一人子一人で育つ。その上、大学入学直後に母親まで病没し、血縁の近い親戚もない、天涯孤独といわれる身の上だった。

幸い、両親の保険金やその他の蓄えにより、大学卒業までの学費や生活費には困らなかったが、頼れる人が誰もいないというなかなか辛い状況である。

そのせいか、絵里は『頼れる年上の男性』に惹かれるという性癖を持っているのだ。

小中高と、同級生の男子には見向きもしたことがない。テレビドラマや映画を見ても、主役のイケメン俳優を尻目に、わきを固める渋い中年俳優に熱い視線を送るタイプだ。初恋は、当時四十歳を過ぎていた小学校教頭先生という筋金入りである。

元々、流行を追うタイプではなく、一人で自分を育てる母を助けるため、勉強の合間に家事やバイトに励むという地味、かつ、真面目系だったので、年かきの教師の受けもいい。

代わりに同年代の男子には『くそ真面目で面白くない地味女』と下に見られていた。もともと、本人の眼中にないので無問題だ。

そんな普通の女子大生として生活していた絵里が、ひょんなことから異世界召喚され、そこで起こったトラブルにより命の危機に曝された。

そこを救ってくれたのが、放浪の旅をしていたムサイ中年男性だ。

彼は命を助けてくれただけでなく、この世界の知識もなく、頼る相手もない絵里を、旅の道連れとしてくれた。おじ専の絵里に、恋心が芽生えるのは当然だ。というか、一目惚れだった。

些か強引に迫りはしたものの、絵里の思いを彼が受け入れてくれたことにより、年の差カップルが成立した——はずだったのだが……

——おっさんは、実は王子様だった。

それが、ライムートだ。

とある事情により本来の年齢よりも年上の姿に変えられ、諸国を放浪していた彼は、絵里の献身により呪いが解け、元の姿に戻ったのだ。

絵里が混乱したのは言うまでもない。理想の相手が突然、別人に変わったのだから……

しかし、最初こそ『詐欺だ、騙されたっ！』と騒ぎはしたものの、巧妙に外堀を埋められ、熱烈なアプローチの数々を受けるうちに、ほだされてしまう。

更に、その後起こった事件により、二人は絆よすなを深めた。今では、正真正銘の夫婦である。

そんなわけで、絵里は一応新妻らしく、夫の心配をしてみせた。

「大丈夫なの？ こんな時間に。まだ執務中じゃなかった？」

「そちらは一段落した。どうせ休息するなら、リイの顔を見ながらにしたい」

実はこの王太子殿下、娶めとったばかりの妻にメロメロなのである。この日だけではなく、いつだって少しでも体が空けば絵里のもとへ飛んでくる。

おかげで、執務室にいない彼を見つけた時は、妃殿下の居場所を捜すのが最速だといわれるほどだ。

「それならいいんだけど、あんまり周りの人に迷惑かけちゃダメだよ」

「リイは冷たいな。俺はいつだってリイの側にいたいのに、リイはそうじゃないのか？」

冷静な妻の言葉に、ライムートがしゅんとなる。

彼が絵里をリイと呼ぶのは、出会った当初、そう呼んでいたからだ。

こちらの人々にとって『絵里』という名は発音しづららしい。

もっとも侍女たちはきちんと『絵里様』と呼んでくれていた。ただ、今更、呼び名を変えようとじっくりこないで、侍女を含めた一部の人たち以外の間では今もリイのままになっている。

そして、それを王太子妃としての本名にもしてしまった。だから、今ではごく限られた親しい相手だけが『絵里』と呼ぶ状態だ。

「お仕事はちゃんとしないと。それ以外の時間はほとんど一緒にいるんだから……」

「もっと一緒にいたい。そう思うのだから仕方がない」

愛おしさを隠そうともしない、甘い流し目付きの美形の囁ささきだが、生憎あいにく、絵里には通用しない。

いや、絵里のほうもライムートを愛してはいる。だが、彼女の場合、その対象は内面であり、外見にはほとんど惹かれていないのだ。おじ専のリイにとって今のライムートは若すぎる。

ゆえに「はいはい」と軽くいなし、侍女が新しいお茶を用意してくれたのを見計らって、椅子をすすめた。

お茶にライムートが口をつけるかどうか、といったタイミングで、レッスン室のドアがノックされる。

「失礼いたします。こちらに王太子殿下はお越しでしょうか？」

「……もうかぎつけたのか」

「そりゃそうでしょ」

ため息混じりに咬くくライムートに、絵里は呆れた調子で答える。

姿を現したのは、ライムートと同じくらいの年頃の青年だ。

「殿下。見つけましたよ」

「気を利かせて、もう少しゆっくり来ようとは思わないのか？ ジーク」

「お茶を一杯飲まれるには十分な時間であったかと存じます」

生真面目な返答をする彼は、ライムートの側近のジークリンド。

身長はライムートよりも拳こぶし一つ分ほど高く、鍛え抜かれた体つきをしている。暗褐色あんかっしよくの髪と目に、整った目鼻立ちの持ち主で、ライムートと並ぶと正に目の保養だ。

だが、もちろん絵里はなんとも思わない。平然とその労をねぎらうのみだ。「お疲れ様です、ジークさん。いつもごめんなさい」

絵里とて、きれいな顔だな、とは思う。けれどまったく好みからは外れているため、それに感動したり見とれたりはいしない。

今も顔を赤らめることなく、ひたすら申し訳なきそうにした。

「いえ、妃殿下がそのようにおっしゃるには及びません。全ては殿下のせい입니다」

そんな絵里をジークリンドは、ライムートの妻にふさわしいと認めていた。

彼は、惚ほれ惚ほれするような騎士の札を執とった後、幼馴染おきななじみにして己おのの主あかじである相手に最終通告を出す。

「ご歓談中、誠に申し訳ありませんが、目を通していただきたい報告書が山積みになっております。直ただちに執務室にお帰りいただけますよう、お願い申し上げます」

「わかってる。だが、もう少しだけ……」

「そういたしますと、夕食のお時間に食い込むこととなりますが、それでもよろしいでしょうか？」

「……」
昼は互いにスケジュールが詰まっているため、ライムートが絵里と一緒に食事をとれるのは、朝と夜だけだ。それも、様々な理由でとりやめになることが多い。特に朝は、ほとんど一緒にとれず

にいた。ともに食事ができる夜は貴重な時間である。

ライムートは、渋々ながら頷いた。

たつぷりと未練を残して執務室へとドナドナされていく夫を、絵里は苦笑しつつ見送る。

「困ったもんよね。毎日なんだから……」

「それだけ絵里様が愛されている、ということですよ」

「うん、それはありがたいんだけど……」

——でも、重いんだよね……

口に出すのははばかられるので心の中で呟つぶやく。

もつとも、よく気がつく侍女たちには、絵里が呑み込んだセリフなどお見通しなのだろう。

「シルヴァージュ王家の男性は、代々、愛妻家として知られているのです。今の国王陛下もそうです。先代、先々代様も側妃や公妾はおかれず、王妃陛下お一人を守っていらっしやっただけです」

にっこり笑顔でフォローを入れる。

「つまり、重たい愛は遺伝だ、と？」

——あ、やばい。ペロツと本音が出ちゃった。

せっかく隠した気持ちを暴露してしまい、絵里は内心で慌てる。だが、咎とがめられるどころか、あっさりと同意されてしまった。

「まあ、そうなりますね……」

「ですが、お年を召してこれれば、落ち着くと思います」

しばらくのご辛抱ですよ、と慰めよりも、諦めを勧めてくる侍女たちに、絵里は苦笑いを返すしかなかった。

さて、その日の夜。

すでに夕食もその後の湯浴みと着替えも終わり、今は所謂、夫婦の時間となっていた。

「――父上と母上か？ 俺が幼いころは、それはそれは仲がよくて、目のやり場に困った覚えがある」

「あのお二人が？」

ライムートの膝の上で、絵里は目を丸くした。

ちなみに絵里がこの体勢になったのは、夜着に着替えて寝室に入った途端に抱き上げられ、強制的に座らされたせいだ。拒否権はない。というか、毎度のことなので、諦めている。

「俺の弟妹の数を見れば、察しがつくんじやないか？」

そう言われて絵里は、ライムートの家族を思い出す。現在のシルヴァージュ王家には、ライムートの弟と妹が三名ずついる。無論、全員、王と王妃の子どもだ。

「そりやそうだけど……正直、あのお義父様が、お義母様にそんなふうに接していたとか、ちよつと想像できないよ」

現国王、つまりライムートの父親は、顔立ちこそ息子とそっくりだが、どこかのんびりとした

ムードを漂わせた人だ。一方、王妃である母親は気丈でしっかり者のイメージが強い。

その二人が目のやり場に困るほどいちゃついていたと聞かされても、絵里としてはすぐには信じがたかった。

「まあ、今は随分と落ち着いてきているようではあるな。少なくとも、子どもの目の前でいちゃつかない分別はついたらしい」

「人は見かけによらないんだね……」

両親の代わりに、今度は息子が公然といちゃついているとは、世代交代というやつだろうか。それにしても、ライムートは自分の態度を変だと感じてないのかと、絵里は疑問に思う。

日本人としては平均身長ひだまりの絵里は、こちらの世界ではかなり小柄な部類に入る。

その彼女がライムートの膝の上にちよこんと座っている様子は、『幼女趣味？』と誤解を招きかねない絵柄だ。無論、ライムートにそんな嗜好はないし、絵里はれっきとした二十歳を超えた大人ではある。それでも心配ではあった。

会話を続けながらも、ライムートの手は絵里の体のそこかしこを彷徨っている。柔らかなタッチではあるが、その手つきは幼い子どもへものではなく、夫婦の触れ合いのそれであった。

「見かけそのままの人間のほうが珍しいんじゃないのか？」

ライムートの指先が首筋をかすめた。絵里はくすぐったくて小さな笑い声を洩らしつつ、答える。「……それ、ライが言うとものごうく真実味があるよ」

何しろ、絵里がくたびれた風来坊のおっさんだとばかり思っていた彼は、一国の王子だったのだ。

「俺の場合はあれこれと事情があったからな。まあ、息子としては、目のやり場に困るような事態がなくなったことは喜ばしいかぎりだ。さすがにこれ以上弟妹が増えることもないだろうし——今はそれよりも初孫の顔をいつ見られるのかと、お二人は楽しみにしているらしい」

「あー……」

ライムートのセリフは苦笑混じりのものではあったが、絵里は顔をわずかに曇らせる。

「それって、急がないとダメな感じなのかな？」

「ん？ どういう意味だ？」

「いや、ほら。立派なお家だとあり得る話じゃないの？ ある程度の期間がたっても嫁が妊娠しないと、別の人をすすめられるとかなんとか……」

国王夫妻が孫を期待しているという話が出るのは、今回が初めてではない。

絵里自身が直接言われたことはないものの、ライムートの言葉の端々から、義両親が子ども話題を出していることがわかる。

「リイは、俺の子を産みたくないのか？」

「なんでそうなるの？ 欲しさに決まってるでしょ。けど、結婚してしばらく経つのに、まだ妊娠した気配とかないから……」

しばらくとはいつても、まだ半年も経ってはいない。

けれど、ハネムーンベイビーという言葉を知っており、おそらく国中で一番、後継ぎを必要とする家に嫁いだという自覚のある絵里にとっては、なかなかのプレッシャーになっていた。

いくら愛妻家で知られる王家でもいつまでも後継者が生まれないとすれば、いろいろと問題が出るはずだ。

「母上が俺を産んだのは、確かに嫁いで一年目だったが、上の弟が生まれたのは、それから十年も過ぎてからの話だ」

話の途中でうつつむいてしまった絵里の顎に指を添えて上を向けさせながら、ライムトが言い聞かせるように告げる。

「いつ子を授かるかは、フォスの御心次第だ。焦る必要はない」

「……子どもができないかも、って考えたりしないの？」

自身が不妊かもしれないとは考えたくない。それでも一抹の不安が絵里の中には残っている。

元の世界なら、ブライダルチェックなどというものもあるが、こちらに来てしまったはどうしようもない。

思い切って問いかけてみると、ライムトが絵里の疑念を豪快に笑い飛ばした。

「ないな。思い出してみる——リイがフォスからいただいた加護はなんだった？」

「加護？ ……えっと、あの『愛する者と幸福になる』ってやつ？」

「そうだ。俺もリイも子が欲しい。ならば、絶対に子は生まれる——さっきも言ったが、その時期についてはフォスがよいように取り計らってくれるはずだ。だから、まったくもって俺は心配なぞしていない」

きつぱりとそう言い切ると、不意にライムトがまどう空気を変えた。膝の上に横抱きにした絵

里の顔に、自分のそれを近づけてくる。

それを敏感に感じ取った絵里が瞼を閉じるのとほぼ同時に、柔らかな口づけが与えられた。

「ん……」

ゆつくりと角度を変えながら、幾度も唇が触れ合わされる。それに誘われるように開いた唇の間から、熱い舌が滑り込んできた。

くちゅくちゅ、と舌と舌が絡み合う音が静かな寝室に響く。

どんどんと深くなっていく口づけに、やがて絵里が息苦しさを感じ始めたころ、一度、唇が解放された。

「やだ、もうっ。いきなり、その気にならないですよ」

ふうと大きく息をした後、こちらにも心の準備つてもものがあるのだと、苦情を申し立てる。けれど、ライムートはどこ吹く風だ。

「あまりにもリイが可愛らしくて、我慢がきかなかった。子どものことを不安に思うのは無理もないが、だからといって、くよくよ考えていても仕方ないだろう？」

「それはそうだけど……でも、どうしても、ね」

「まあ、俺としてもフォスにばかり頼る気はない。幸福になるのが約束されているにしても、そこに至る努力は必要だろう」

だから、と。

口調は穏やかなままなのに、ブルーグレーの瞳の奥には、肉食獣めいた光がちらついている。

「努力って、つまりはエッチするってことでしょ？ ……あつ、ちよつ、こらっ?! もうっ、もっ」とムードのある誘い方とできないの？」

しばらく肩や首筋を彷徨っていた指先が、大きく開いた夜着の胸元から内部へ忍び込んできた。それを布の上から押さえつけて、絵里はそれ以上の動きを制す。そして慌てて諭したのだが、効果はなかった。

「リイが、いきなり押し倒すのはダメだと言うから、その前にちゃんと会話をするようにしたんだが……そうか。それだけでは足りんのか」

その言葉に、絵里は妙に納得した。膝の上にお座りという中途半端な状態にもかかわらず、彼が愛撫の前に会話を始めたのは、こんな理由があったからだだったのだ。

「あ、いや、そういうわけでもないんだけど……」

絵里の腕力ではライムートの動きを妨げられないのに、彼の手は制止された位置でおとなしくとまっている。それは、彼が絵里の希望を叶えるつもりがあるという意思表示だ。

「ムードのある誘い方、だったな。生憎と、俺はあまりその手のことが得意じゃない。リイのいたところでは、男はどんなふうにも女を誘うんだ？」

「んなの、私が知ってるわけではないですよ」

地味系真面目女子だった絵里には、男女交際の経験がない。

ライムートにリクエストした『甘いムードの会話』は、テレビや映画の中で見聞きしたものだ。

しかも、そういったシーンは大抵は主役のイケメン俳優が担当する。絵里の視線は脇を固める渋い

おじ様たちに集中しているために、なんとなくそういうシーンがあつたくらいにしか記憶に残っていないかった。

それに、この手の会話はこういう状態になる前に交わされるものだ。

「……ごめん、降参。もういい、よ？」

自分が理不尽なことを言っていると悟った絵里は、しゅんとしつつ謝る。

そもその話、ライムートとそういうことをするのが嫌というわけではない。

ただ、未だに照れがあり、それをなんとかしたくて口から出てしまっただけだ。

自分の身勝手だと反省した絵里は、彼の手を押さえつけていた手を引き戻そうとした。しかし、その途中でライムートの大きな掌（てのひら）に包み込まれる。

口元まで運ばれ、その掌（てのひら）にちゅつと音を立てて口づけられた。

「ライ……?」

てつきり、すぐに始まると思っていた。戸惑（とまじ）って声を上げる絵里に、ライムートが小さな笑みを浮かべて言う。

「俺もリイもわからんなら、二人で模索するしかないということだ。ジークあたりに聞くのは違うんだろうしな。俺はあまり口が回るほうではないから、しゃれた口説き文句なぞ、いきなりは出てこんが……あんな話をしていてなんなんだが、正直なところ俺は、子はもう少し後でいいと思ってる。しばらくは、リイを独り占めしていたいからな」

そのセリフに、絵里の顔は真っ赤になる。

どことが口下手だ。とんでもなく甘いセリフを発しながら自覚していないのだから、質（なま）が悪い。

「ライ、それ反則……」

「リイ?」

真っ赤になつてうつむく絵里の顔を、ライムートが覗き込んでくる。

「そんなこと言われたら……好きに言って言うしかないじゃないっ」

その言葉を口にした途端、晴れやかに笑ったその顔は、まさに光り輝く超イケメンである。

まあ、絵里としては顔の造作よりもそこに浮かんでいる表情のほうが重要なのだが、どちらにせよ『犬も食わない』といわれる状況であるのは間違いない。

「ライのばかっ！ もう……大好きっ」

一転してぎゅつと抱き着く。

お互いの体格にかなりの差があるので、下手をすると幼い子どもが親にしがみついているようにしか見えないが、無論、内実はまったく違う。

「リイ、愛してる」

「うん、私も好き……」

どちらからともなく唇が重なる。

先程とは違い、最初から濃厚に舌を絡め合う情熱的なものだ。

一旦は止まっていたライムートの手が、動きを再開した。絵里の夜着は、襟（えり）ぐりを大きく開けたデザインであるために、布が手の動きを邪魔するということはない。

本人が小さいと気にしている胸のふくらみを片手で包み込まれ、柔らかく刺激してくる。中央の赤い突起が、すぐさま立ち上がった。

「気持ちがいいか？」

掌てのひらの中央にその突起をあてて感触を楽しみながら、ライムートが口づけの合間に問いかけた。絵里は真っ赤な顔でこくりと頷く。

至近距離から感じる吐息はすっかり熱を帯び、瞳も情欲に潤うるんでいる。

この世界では幼く見える容姿とは裏腹に、絵里は成熟した『女』であった。

少し強めに胸を愛撫されると、小さく開いた唇の間から甘い喘あえぎが零れ落ちてしまう。

「ん……あんっ」

その声をもっと聞きたいのか、ライムートの動きに熱が入った。

「え？ あ……きやつ」

ライムートは襟えりもとに差し込んでいた手を引き抜くと、絵里の肩や脇腹を撫でていたもう片手も動員し、彼女の体を軽々と抱き上げる。そのままわずかに上半身をひねり、絵里をベッドの中央にポスンと着地させた。

「……寒くはないな？」

「うん、全然」

季節は初春だが、さすがに一国の王城で、しかもここは王太子の部屋である。むしろ体に熱が籠こもって暑いくらいだ。

そう絵里が答えると、ライムートはベッドの上にペタリと座り込んでいる彼女の足元をまさぐり、一気に夜着をめくり上げた。

柔らかく滑らかな生地でできたそれは、睡眠を妨さまたげないように、かなりゆつたりとした作りになっている。それは彼にとっても都合良かったようで、そのままの勢いで、腕と頭を抜かせると、後は邪魔とばかりにベッドの下へ放り投げた。次いで、自分が着ていた簡素な上着と下穿したばきを恐ろしい勢いで脱ぎ捨て、絵里の体に覆おほいかぶさってくる。

「ライムート……なんか、がつついてる？」

ライムートとこうなる予定の夜は、絵里は下着を身に着けていないので、すでに全裸である。ライムートも同様であるので、今、二人の間を阻はらむものは何もない。

「あんな可愛らしいリイを見せつけられたら、嫌でもそうなる」

「……こんなに毎日してるのにな？」

「まったく足りんな。できれば、執務なんぞ放り出して、一日中ここに籠こもっていたいくらいだ」
「それはやめてあげて。いろんな人が泣いちゃうから」

イチャイチャした会話をしたがっていた絵里だが、今、交わしているのがそれであるという自覚はない。そして生憎あいにくと、それをツッコめる者はこの場にいなかった。

「そうだな。俺が啼なかせたいのはリイだけだ」

「……今のライの顔、ものすごくエッチい」

二人は、どこのばかップルにも負けない会話をごく普通に続ける。



「リイも、ものすごく色っぽい顔をしているんだが……まあ、話はこのあたりにして……」
「ん……」

三度、互いの唇が重なった。

くちゅくちゅと互いの舌を絡め合い、唾液を交換する。

絵里の口中に差し入れられた舌が、上顎の内側の敏感な部分をチロチロと刺激した。絵里はくぐもったうめき声を上げて、ライムートの逞しい首筋に腕を巻きつけ、ぎゅっと抱きしめる。

「ん……む、う……」

彼の明るい金茶の髪はさらさらとしていて、絵里が指を絡めようとしてもなかなかうまくいかない。何度かチャレンジした後に焦れ、わしゃわしゃと頭髪をかき回した。

その動きに、ライムートが小さく苦笑し、彼女の片手をとらえてシートへ押しつける。

片手で体重を支え、絵里の唇を解放して体を下へずらしていった。

頤おほかから首筋、うなじへライムートの唇が移動する。そしてその合間に、ところどころを強く吸い上げた。

そのたびに絵里の体に小さな震えが走る。彼はそれを満足げに見やりつつ、やがて胸のふくらみにたどり着いた。

「ああんっ」

しばらく放置されていたというのに、その先端は相変わらず硬く立ち上がっている。そこに誘われるようにライムートが唇を落とすと、絵里は甘い声で啼ないた。

彼はもう一方の胸へ手を伸ばし、ゆっくりと揉みながら押しつぶすようにして刺激してくる。逞しい体の下敷きになった腰が疼き、物欲しげに揺らめいた。

「あ、あっ……ライイ、っ」

恋人繋ぎでシートへと縫い留められた手は動かせないたため、絵里は残る片手でライムートの頭髪を激しくかき乱す。

胸のふくらみを口に含んだライムートにチロチロと舌を動かされ、背中が弓なりにのけぞった。

「ああっ！」

その反応に、ライムートの愛撫に更に熱が籠る。絵里はぎゅっと強く頭髪をつかんだ。彼はそれに応えて、含んだ胸の先端を強く吸い上げた後、軽く歯を立てる。

「ひっ、ああっ……！」

その途端に、ひくりと少し絵里の体が震え、ライムートの髪をつかんでいた手から力が抜ける——小さく達してしまつたのだ。

絵里が大ききをかなり気にしている胸は、ライムートに言わせると、信じられないほど柔らかく、大層敏感なのだそうだ。その揉み心地と反応のよさに、つい夢中になって弄り回してしまうらしい。けれど、これほど感じたのは初めてのことだ。

「大丈夫か、ライイ？」

慌てたように彼は問いかけるが、絵里はそれどころではない。まさか胸だけでイカされるとは思つていなかった。はあはあと荒い息をつきながら、恨めしくライムートを見上げる。

文句の一つも言いたいところではあるものの、それより息を整えるのに忙しい。精一杯睨みつけていると、ライムートの様子が変わつた。

「ああ、ライイ……っ」

感極まつたというふうに、一言、彼女の名を呼ぶと、先程にもまして愛撫に熱を入れてくる。

「や、あっ……あ、ああっ、だ、めえっ！」

達した余韻が冷めるどころか更に煽られて、絵里は悲鳴じみた嬌声を上げた。

「あ、やっ……ああんっ！」

形が変わるほどに胸のふくらみを強くつかまれ、パンを捏ねるように揉まれる。かと思つと、一転して唇で柔らかくつばまれ、舌でからめとられ転がされた。

絵里の片手は、すぐるものを求めるようにシートの上を彷徨う。

「やっ……胸、ばっか、りっ……っ」

左右交互に揉まれ、舐められ、吸い上げられ、絵里は涙混じりに抗議の声を上げる。

ふくらみ全体が熱を帯びて重く張り、先端の蕾は充血して硬く立ち上がった。そこから、じんじんとした痺れに似た感覚が伝わってくる。

執拗な愛撫のおかげで体全体が熱に浮かされ、敏感になりつつあるのだ。

心臓は痛いほどに脈打ち、ライムートの髪が首筋やうなじをかすめるたびに、ぞわりとした快感が広がる。

腰の内部に怠い熱が湧き上がり、とろりとした液体が太ももの付け根から滴つた。

それなのに、ライムートときたら胸にばかり夢中で、一向に他の場所に触れてくれようとはしない。

「も、やだあっ……意地悪、しないで……っ！」

絵里は必死になつて体をよじり、恋人繋ぎにされていた手も振り払う。両手を使って後頭部や背中をたたき、半泣きになりながらなじると、ようやくライムートが絵里の状態に気がついた。

「ライのばかっ！　なんでいつも、む、胸ばっかり……っ！」

「……すまん」

ライムートとしても、別に絵里を虐めたかったわけではないのだろう。だが――

「気をつけてはいるんだが……ライの胸が、あんまりにも触り心地がよくて、つい」

「つい、じゃないっ！」

涙目で抗議する絵里に、ライムートが申し訳なきそうに謝る。

しかし、このような状態になるのは、実のところ今回だけではなかった。こういった行為に及ぶとかなりの高確率でライムートは暴走してしまうのだ。

「いつもいつも……いつも！　こんな貧相な胸揉んで、何が楽しいのよっ」

「それは違うぞ。ライの胸は素晴らしい」

ライムートは女性の胸に執着する性癖を持っているわけではない。あくまでも絵里といる時だけなのは、彼女もわかっている。けれど、どうしても慣れないことはあった。

「何、力説してるのよお……」

「大事なことだ。大きさなど関係ない。ライの胸は最高だ」

キラッキラしたイケメン王子に、真顔でとんでもないことを主張されて、絵里は脱力した。

このおっぱい星人をなんとかしてくれと、神頼みしたくなる。

事あるごとにその素晴らしさを主張するライムートと、あくまでも大きさにこだわる絵里の会話は平行線をたどり、まじわったことはない。

そして、このようなネタで何度も争うのは、間抜けとしか言いようがなかった。

「はあ……もう、いいよ」

ため息をついて、絵里は白旗を上げた。

正直なところ、この件に関してライムートを説得するのはすでに諦めている。それよりも今は、疼いて仕方がないこの体をなんとかしてほしい。

――結婚式を挙げてはや数か月。特別な事情がないかぎり、毎夜のように体を繋いでいるせいで、絵里の羞恥心のハードルはかなり低くなってきていた。

「しかし……」

「いいからっ！」

まだまだ胸の素晴らしさについて語りたらしいライムートの言葉を、強引に断ち切る。

ついでに両手を伸ばして彼の首に絡ませると、その頭を引き寄せて自分からキスをねだった。

「子ども、つくるんしょ？」

少々――というよりもかなりストレートなお誘いだが、今の絵里ではこれが精一杯である。それ

でも、真つ赤な顔と上目遣いで発言は、効果が抜群だったようだ。

「……そうだったな。愛らしい妻のおねだりに応えられないようなら、男が廢る」

本人としてはまだ若干、主張したりない部分もありそうだが、さすがに空気を讀んだのか、ライムートが口を閉ざす。

「リイ……愛してる」

仕切り直しの一言を口にする、ちゅつと音を立てて口づけてきた。

とてつもなく間抜けな一幕はあったものの、結局のところは想いあった者同士だ。ライムートは絵里のツボもきちんと把握している。

先程の罪滅ぼしのつもりもあつてか、絵里に触れる手つきは丁寧で、それでいて情熱的だった。

「ん、あつ……ライ、っ」

口づけの最中にも、肩から腕へのラインをライムートの指先が優しくたどる。大きな手が絵里の手を持ち上げると、指の一本一本にキスをしてきた。

左右の手に同じことを施したのちに、体を下方へずらし、慎重に胸の辺りを避ける。——どうやら、また触れてしまえば元の木阿弥になるという自覚はあるらしい。ライムートにとって絵里の胸というのは、恐ろしいまでの魅力があるようだ。

そして彼は、絵里の体全体に愛撫を施していく。

臍のあたりに唇を落とされ、時折強く吸い上げられる。更に下へ向かった唇は、とうとう淡い下生えに包まれた小さな丘に到達した。

同時に、彼の両手も脇腹から腰のラインを何度も撫でさすり、ゆつくりと下降していく。

やがて、カーブを描く臀部と太ももの付け根にたどり着くと、絵里の腰を軽く持ち上げた。

「え？ ……きやつ！」

そのまま一瞬のうちに両脚を左右に割り広げられた絵里は、小さな声を上げる。もちろん嫌がっているわけではない。それどころか、ねだるようにちらりと視線を下げて彼を見る。

すると、期待をたえた熱い眼差しに出会うことになった。

「声は抑えなくていいからな」

短くそう告げた後、ライムートがおもむろにそこへ顔をうずめる。

「あつ！ あ、あつ……ラ、イッ！」

まだ触れられてもいないのに半ば立ち上がり下生えの間から顔を出していた紅い粒を、彼が唇で包み込んだ。軽く挟んでその感触を楽しんだ後、たつぷりと唾液を載せた舌で舐める。

「あ、ああんっ！」

どこもかしこも敏感な絵里は、すぐに反応する。尖った舌先でチロチロと弄ぶように刺激され、背中が反った。

「やつ！ ああつ……そこ、っ」

「気持ちがいいんだろう？ 気にせず、好きなだけイクといい」

「あつ……ん、あんっ！」

ライムートが絵里の両手両脚を角度をつけて持ち上げ、自分の両肩をその下へ滑り込ませる。そ

のまま、がっちり固定する。

更に指を伸ばして、脚の付け根の中心を左右に割り開いた。そこからとろりとした蜜が流れ落ちる。

「いい子だな、リイ」

すっかりと準備ができている様子に、ライムートが嬉しげに囁く。そして先程から口で愛撫していた紅い突起へ指を添え、少しばかり強めに押し込んだ。

「やつ、あ……う、あんっ！」

柔らかな愛撫から一転しての強い刺激に、絵里はあっさりと二度目の頂点を極める。

背筋は強くのけぞり、薄い腹がひくひくと痙攣した。数秒後に、全身が弛緩してシートの上に沈み込む。同時に、亀裂から新たな蜜がどっと溢れた。

ライムートがそれを舌で掬い取り、幾分柔らかくなった突起へ塗り込めるようにすると、絵里の喉からかすれた悲鳴が上がる。

「や、待ってっ！ 私、まだ……っ」

昇りつめてすぐの新たな刺激は、強すぎる。

ライムートがそこで一度動きを止めた。絵里の様子を気遣い、更に下にある蜜の出口へ攻略対象を変更した。

「ひゃっ……んっ！」

まずは舌の全面を使い、ペろりとそこを舐め上げる。彼の両肩に担がれた絵里の脚が、ピクリと

はねた。

快感に震えるそれを落とさないように慎重にバランスを取りながら、ライムートは更に唇全体で溢れ出る蜜を吸い取り、音を立てて嘸下する。

体液の味などろくなものではないはずなのに、彼はそれを甘いと言った。何度もその行為を繰り返す。

吸い取られる先から、次から次へと新たな蜜が零れ、絵里はどれほど自分が感じているのかを知る。

頃合いを見計らい、ライムートが尖らせた舌尖を熱い亀裂の中へ差し込むと、絵里の体の震えが大きくなった。

「あつ、あつ……ライツ！ そ、そこっ」

入り口のすぐ近くにある敏感な箇所を舌尖で探られるたびに、絵里の奥で不思議な痺れが起こる。不意に隙間から指を一本差し込まれた。

舌と指とで刺激されて、奥からはまたも新たな蜜が溢れてくる。それを利用してライムートが更に奥へ指を差し入れてきた。

「あつ、ひあ……や、あんっ！」

その指先で内部の壁を円を描くようにして刺激され、絵里の嬌声が高くなる。

ライムートは一目体を起こし、指先の愛撫へ集中した。指も一本から二本、やがて三本まで増やし、ナカでばらばらに動かす。

絵里の声が次第に切羽詰まったものへ変化した。

「やつ——また、くるっ！ また、き、ちゃ……っ」

「気に入るな、好きだけいけ」

「やつ、ちがつ……待って!? なんか……変、なのっ!」

いつもとは違う感覚に、絵里は必死で言い募った。けれどそれに構わず、ライムートが彼女の内部の弱い部分を集中的に攻めたてる。

「ダメッ、たら……やつ! あ、ああっ……あ、あ……っ」

止めとばかりに内部の一点を突いた指先が、細かく震えた。同時に、しばらく放置されていた紅い突起も強く吸い上げられる。

「ひっ! いっ……やつ、な、んか、出、あ……や、あんっ!」

ぎりぎりの状態で強い刺激を与えられ、またしても頂点を極めた絵里が、高く啼いた。

つま先をぴんと張り、痙攣する。ライムートが指を咥えこませている場所のほんの少し上の部分から、さらさらとした液体が勢いよく飛び出した。ライムートの手指と顔が濡れる。

「いやあっ!」

至近距離で蜜とは違う粘度の低いその液体を浴びた彼が、やはり濡れてしまった手の甲で顔をぐいと拭う。

ただでさえめつたにお目にかかれないレベルのイケメンの、更に色気を全開にした仕草だが、絵里は別のことが気になった。

「や、だっ! ラ、イのばかつ! わ、私……っ」

達した余韻もそこそこに、泣きそうになりながらライムートをなじる。

「出る、って……言ったのに! どうして、やめてくれなかったのっ!? わ、私、もう、死んじやいたいっ」

とうとう本気で泣きだすと、今度はライムートが慌てた。

「リイ……もしかして、粗相したと思ってるのか?」

「ライのせいでしょうっ!」

怒りと羞恥のあまり、全力で殴りかかったが、元々の体格差と、達した後の脱力もあって、ライムートにほとんどダメージを与えられない。

彼は落ちていた態度で、今の現象がどのようなものであるのかを説明してくれた。

「今のは潮吹きというやつで女性が感極まると起きるんだ。粗相とかじゃないぞ?」

ただし、女性であれば誰にでも起こるといっわけではない。

二十歳を過ぎても恋愛関係にとんと縁のなかつた絵里は、まったくその手の知識がなかった。

「……それ、ホント? 嘘じゃなく?」

彼女はどうかにか、ライムートの言葉を理解する。

「本当だ。まあ、俺もお目にかかるのは初めてだが、リイがそれほど感じてくれたという証拠だ。男冥利に尽きるな」

「え? そんなこと……」

「そうでなければこうはならん——リイも気持ちよかったんだろう？」

「え？ そ、りや……まあ、うん……」

問いかけられてわずかに躊躇ちゅうちよしたものの、『確かに……ものすごく気持ちよかった』と、素直に告白する。

それにしても今夜は、胸だけでイったり潮を吹いたりで、初めて尽くめだ。

「それだけ、俺になんてくれたということだ。丹精たんせいした甲斐かいがあるというものだな」

「丹精……って」

キラキラしいイケメン王子のくせに、ライムートは時折、妙におじさん臭い物言いになる。それは彼のこれまでの経緯を考えると仕方ないことだ。

まあ、そのことはさておき——誤解が解けたところで、行為の再開と相成る。

なぜなら、ライムートの下半身事情がもたなかったのだ。

「イったばかりで辛いだろうから、最初はゆっくりと、な？」

そんなことを言いながら、改めてライムートが絵里の体の上に覆おほいかぶさった。隆々りゅうりゅうと天を仰いでいるモノの先端を、熱く蕩どろけた中心に擦こすりつける。

「んっ……」

絵里の小さな蜜口がライムートの先端を受け入れた。

先端のふくらんだ部分を入り口の縁に引つ掛けるように、数回抜き差しを繰り返され、彼女の体
に走る震えが大きくなる。

「リイは、これが……好き、だろうか？」

欲情でわずかにかすれた声で問いかけられ、真っ赤な顔をした絵里は小さく『ばかっ』と返す。

同時に、シーツの上に所在なげに投げ出していた腕をライムートの首に回した。

言うまでもなく、それらは肯定に他ならない。

ライムートは満足そうににやりと笑った後、硬く屹立きつりつしたそれを更にゆっくりと奥へ進めてきた。

「んう、んんっ」

途中、何度か細かく前後に動く動作を交えつつ、ゆるゆると最奥にもぐり込んでくる。ほどなく先端が柔らかい肉の壁にぶつかった。

「あ……き、気持ち、いい……」

絵里はうっとりとかき、彼の背中に回した腕に力を入れる。

全てを収めきった後のこの一瞬を、彼女は好んでいた。それをライムートも承知している。

先程、潮を吹くほど深く達したためか、絵里の内部の壁はいつもよりも更に柔らかく、細かく震えて吸いつき、ライムートの屹立きつりつしたモノを包み込んでいる。

絵里はより彼を感じようと臉まぶたを閉じた。

すぐに、じっとしているだけでは飽き足りなくなったライムートが、奥の壁を軽くノックする。

「あんっ！」

絵里は無意識に蕩よろけた声を上げてしまった。

少し間を置いて何度か同じようにされ、彼の背に回した手に更に力が籠こもる。絵里の体がわずかに

シートから浮き上がった。

「ライ……も、いいよ」

入れられたばかりの時も気持ちいいが、数えきれないほどライムートに抱かれた絵里は、それよりもっと強い快感を知っている。

すでに舌や指で絶頂を極めてはいるものの、彼の剛直で内部をこすられて達する悦楽は格別だ。

「いっぱい動いて……もつと、気持ちよく、して？」

もつとライムートが動きやすいようにと、自ら大きく脚を開き軽く膝を曲げると、受け入れる角度が微妙に変わる。その刺激に、ただでさえ狭い内部の壁の圧力が増した。

それがライムートの本能を刺激する。

「ライ——大好き」

「ああ、リイ。俺も、愛してる……っ」

ライムートの瞳に最後の熱が灯る。

「っ！」

ずんつ、と強く最奥を突かれ、絵里の背中が大きく反り返った。

その隙間にライムートが腕を差し込み、彼女の体を両手でしっかりととらえると、その中心に向かって何度も腰を打ちつけていく。

「あ、あんっ！ んっ！ んうっ」

ライムートの先端が最奥を抉るたびに、甘い悲鳴が絵里の口から洩れた。

ライムートが動くたびに柔らかな胸のふくらみが卑猥に形を変える。硬くなった先端は彼の腹筋に擦られて、それがまた快感を呼んだ。

ひときわ強く腰を押しつけられ、内部に留まりきれなかった蜜が密着した部分から溢れ出る。

ぐちゅぐちゅと粘着質な水音が、室内に淫猥なムードを充満させた。

「くっ……リイ、ッ」

「ひ、いんっ！」

短い悲鳴とともに、絵里のつま先がぎゅつと丸くなる。

根元まで呑み込ませたライムートが、捏ねるように腰を使うと、左右に押し広げられた脚が痙攣を始めた。

「や、ダメっ！ ま、また……っ」

絶頂の気配に、思わず絵里は腰を逃がそうとする。その腰をとらえ、ライムートはぐりぐりとある一点をなおも刺激した。一番弱い部分を目掛け、大きなストロークで何度もそこを攻めたてる。

絵里の内部は、震えながらライムートの剛直を食いしめた。

彼は止めとばかりに腹筋を密着させ、蜜口の上の紅い突起を捏ねるように腰を使う。

「あ、やつ！ ああ……いつ、ク、う……っ！」

絵里の熱い内壁がうねり、搾り取るような動きになった。

「つく……」

荒い息をつき、絵里は小刻みに痙攣する。

その体を抱きしめたライムートが、圧倒的な快感をやり過ぎたためにか、硬く奥歯を噛みしめた。その努力の甲斐あって、絵里が脱力してぐったりとシーツに沈み込んで、まだ彼のモノはその内部で硬さを保っている。

「や、待っ……今、まだ……ああっ、ダメえっ!?」
達したばかりの内部を更に抉られて、絵里は悲鳴を上げた。

しかし、その主張とは裏腹に、内部の壁はまだ物欲しげにライムートに絡みついたままだ。それどころか、先程とはまた違った動きで、彼の子種を搾り取りにかかっている。

絡みつき、引きとどめる動きをする粘膜。それを引きはがすようにライムートが腰を引き、再び根元まで自身を呑み込ませた。

ひきつった声が絵里の喉から洩れる。それなのに内部は、そんな彼の動きを喜んで受け入れていた。

ぐちゅ、ぬちゃ、とライムートの剛直に激しくかき回されている内部から、泡だつた蜜が溢れ出してくる。

お互いが接合した部分は、もう洪水だ。

「ひ、いんっ！ あ……ひ、あんっ！」

絵里の目は次第に焦点を失い、開きっぱなしの唇の端からは飲み込みきれなくなった唾液が流れ落ちた。達したばかりで落ち着く暇もなく、新たに与え続けられる快感により、小さな絶頂を何度も繰り返す。

その唇から上がる声は、すでに言葉の体をなしていない。

激しすぎるライムートの動きについていくのがやっとで、必死になって自分の腰をとらえている手に取りすがる。少しでも衝撃を弱めようと、脚を彼の腰に巻きつけた。

却ってそれが互いの結合を深くしていることには気がつかない。

「やっ、もっ……無、理いっ」

絵里の必死の思いで紡いだ言葉に対するライムートの返事は、無情なものだった。

「大丈夫だ。まだ……イける、だろう？」

そう嘯き、彼は片手を接合部分のすぐ上へ伸ばす。

「ひいっ！ ——ダメッ！ そこ、ダメエッ」

「ダメ……じゃない。ほら、言える、な？」

「あ、ひっ……ああ、きも……ち、いっ！ いいっ……ああんっ」

「こっちか？ それとも……こちらかな？」

「ああ、そこっ!? ……ああ、あ——んう、んんっ！」

痛いほどに赤く充血して立ち上がった突起と、最も感じる部分を同時に攻められ、絵里はライムートの肌に爪が食い込むほど手に力をこめる。男の腰に巻きついた脚も、渾身の力で締め、頭頂部がシーツをこすりそうなくらいに激しく背中がのけぞった。

「っ！ ……っ、っ!!」

声にすらならない、吐息のみの絶叫が絵里の喉の奥からほとばしる。

膾壁に強く締めつけられ、ようやくライムートもその欲望を吐き出した。
「っ、は……」

何度も熱い白濁を絵里の内部へ注ぎ込む。そのたびに、びくびくと震える肉棒に内部の壁が絡みつき、もっと出せとばかりに蠢いた。

「は……あ、は……う……」

最奥に最後の一滴まで熱いものが注がれる。

絵里は荒い息を吐きつつ何度も大きく胸を上下させた。まだ息が整わず、強すぎる絶頂に、目もうつろなままだ。

無防備極まりないその姿を見下ろしたライムートが、そつとその平らな腹へ右手を滑らせた。

ちょうどその掌の下あたりが、今しがた彼が子種を流し込んだ部分のはずだ。

「気持ちが悪いだらう？ 風呂に入れてやろうな」

優しくそう囁いて、両手で絵里の体を抱き上げた。その拍子にとろりとした液体が、体内から零れ落ちる。それを見た彼が、「また改めて注ぎ込んでやればいい」と笑った。

まだ正気に戻り切れておらず、ライムートの言葉に気がつく余裕のない絵里は、抵抗せず受け入れる。

そして、最初はごく当たり前にちゃぶちゃぶという水音だけがしていた浴室は、すぐに絵里の悲鳴じみた嬌声が響くことになった。

第二章 さらば、平穏な日々

そんな夜を過ごした翌朝。絵里が無事であるはずがなかった。

「……毎度毎度、自分が情けない……」

新婚はやほやの王太子妃が、頻繁に体調を崩し予定された時間に起床できないことは、シルヴァージュの王城では至極当然のこととして受け入れられている。

だが、それがわかっていても——否、だからこそ、目が覚めた時に、すでに太陽が高く朝食よりも昼食に近い時刻になっていることに、絵里はなんとも言えない自己嫌悪に陥っていた。

たった一人で自分を育ててくれている母のために、中学生のころから朝食と二人分のお弁当作りをしていた。そのせいか、朝寝坊自体に罪悪感を感じるのだ。

そんな状況で、彼女の機嫌ははつきり言ってよくない。

ただ、その思いをぶつけようにも、絵里をこうした張本人はというと、自分もかなり体力を使わずなのにもいつもどおりの時間に起床し、旺盛な食欲で朝食を平らげて、すでに執務に取りかかっている。

まさか、仕事中にそんな文句を言いに行くわけにもいかない。ならば、夕食で顔を合わせた時にもと思うのだが、時間が経つうちに『きっちり起きられない私も悪いんだし……』と思い始めてし

まう。

傍から見れば、お熱い新婚さんぶりであった。

「体調を崩されてしまっているのですから、仕方がございません」

「それより、もう喉は渴いてませんか？　もう少しで昼食ですけど、消化のいいものを頼んでおきますね」

「ありがとうございます。ディア、エルム」

疲労困憊で起きられないのはいつものことだが、昨夜は寝室に続いて浴室でも……したため、今朝の絵里は軽い脱水症状を起こしている。

枕から頭を上げた途端に激しい頭痛に見舞われて、思わずうめき声を上げてしまふ。

それに驚いたのは、絵里を起こしに来た侍女たちだ。

大慌てで医者と呼ばれ、彼女付きの女官長であるラーレ夫人まで飛んてくる。診察の結果、安静にして水分を摂れば大丈夫ということになって、ラーレ夫人はようやく胸を撫でおろした。

侍女たちは甲斐甲斐しく介抱してくれているが、診察結果を聞いたラーレ夫人は怖い顔で部屋を出ていったきりである。行き先はおそらく……

苦手な元乳母に締め上げられるライムトの姿が絵里の頭に浮かぶが、自業自得というやつなので同情はしない。

後宮の常駐医は穏やかな人柄の初老の人物で、渋い男前ではないものの、『優しいおじいちゃん』といった言葉がぴつたりの風貌をしている。そんな――つまりはキラキライケメン王子よりも

よほど好みの相手に赤裸々な夫婦生活を語る羽目になった絵里としては、そのくらいのペナルティは当然であった。

ついでに言えば、この日の午後はシルヴァージュの歴史や地理を学ぶ予定になっていたのだが、絵里の体調不良を受けて急遽、中止になっている。

「家庭教師の先生にも、ご迷惑かけちゃった……」

「仕方ございません。今日は一日、ゆっくりとお休みになられたほうがいいというお診立てです」
「自分でももちろんするけど、ディアたちからも先生方にお詫びをしておいてね」

「はい、わかりました！　それと、昼食までは今少し時間がありますから、それまでベッドでお休みになっていてください」

「ありがとうございます」

ここで『大丈夫だ』と言い張っても、絵里命の侍女たちが納得しないだろうことはわかっていた。甘やかされすぎだとは思いつつも、絵里はありがたくその言に従うことにする。

幸い、少しの仮眠の後の昼食は、ほぼ全てを平らげることができた。

みっちりスケジュールが詰まっていたはずの午後がぼっかりと空いてしまったこともあり、気分転換に庭園を散歩したり、侍女二人をお茶に誘っておしゃべりしてみたり……と、久しぶりのんびりと過ごす。そのおかげもあって、絵里の体調は夜になるころにはすっかり回復していた。

ここで問題になるのはせっかくな絵里が復調しても、また今夜の……で逆戻りという可能性だ。

さすがに二日連続で脱水症状ということはあるまいが、誰が見ても不調といえるほどに具合が悪